

奈良女大家政 ○太田さち 河野安美 渡辺崇子
 國嶋道子 磯田憲生 梁瀬度子

目的：だんらん空間のあり方に関する研究（國嶋ら、渡辺ら本大会発表）の一環として、本研究では、戸建住宅を対象として調査を行い、主婦の意識や家族の生活時間・行為が、だんらんの実態にどのように影響しているかを検討している。”第1報では、主婦のだんらんに対する考え方やだんらん空間の実態について報告したが、本報では、特に、生活行為の面からだんらんについて分析し、意識の面との関わりについて、検討を行った。

方法：奈良県下の戸建住宅を対象とし、アンケート留置法で行った。調査期間は、1983年8～9月。配布数は203票、回収率は95.6%、有効回収票は194票。主な内容は、1) 生活に対する意識及び実態、2) だんらんに対する意識及び実態、3) だんらん空間に対する意識及び実態、4) 雰囲気の主観的評価である。

結果：アンケートにおいて、17時以降～就寝までの6才以上の全家族の生活場所と行為を生活時間表に記入してもらい、そこから、だんらん行為をとりあげて、時間と行為を検討した。その結果、主婦の意識の上でのだんらん時間は、平均約2時間であるが、これは、LDK空間に全員または1人欠けて集まっている時間と対応している。夕食にそろそろ頻度が高い程、また、世帯主の帰宅時間が早い程、全員でそろそろ時間が長く、空間別にみると、特に、D空間でその傾向が顕著である。さらに、だんらんに影響をあたえる要因についても数量化理論により分析し、集合住宅の場合との比較も行う。

1) 太田ら “だんらん空間のあり方に関する調査研究（第1報）”

（社）日本家政学会関西支部第5回研究発表会 1984年